

2026 年 10 月 29 日

9月 FD-ID 指数

～企業のコスト上昇圧力が小売価格へ転嫁され始めている可能性～

経済調査部 主席エコノミスト 阿原 健一郎

(Tel : 050-5470-4868)

足もとで逆転するFD-ID指数と消費者物価指数の伸び率

本日公表された9月の最終需要・中間需要物価指数（FD-ID指数）を需要段階別（ステージ別）に見ると、まず、最も川上に位置する「ステージ1」は前年比+22.2%と、前月（同+24.1%）から伸びが鈍化した（図表1）。ステージ1に分類される品目のうち、ウェイトの大きい原油価格の伸びが落ち着いたことで、前年比寄与度が約▲2.1%pt縮小し、指数全体を押し下げた。もっとも、原油のスポット価格が輸入物価指数に反映されるまでには2～3か月程度のラグが存在する。足もとの原油価格の再上昇を踏まえれば、ステージ1の指数は今後再び上昇に転じる可能性が高い。

次いで「ステージ2」は同+16.0%と、前月（同+15.1%）から伸びが幾分加速した。これは天然ガスや銅の価格上昇が指数を押し上げたためである。足もとの国際コモディティ価格の動向を見る限り、ステージ2の指数も当面は高止まりする公算が大きい。

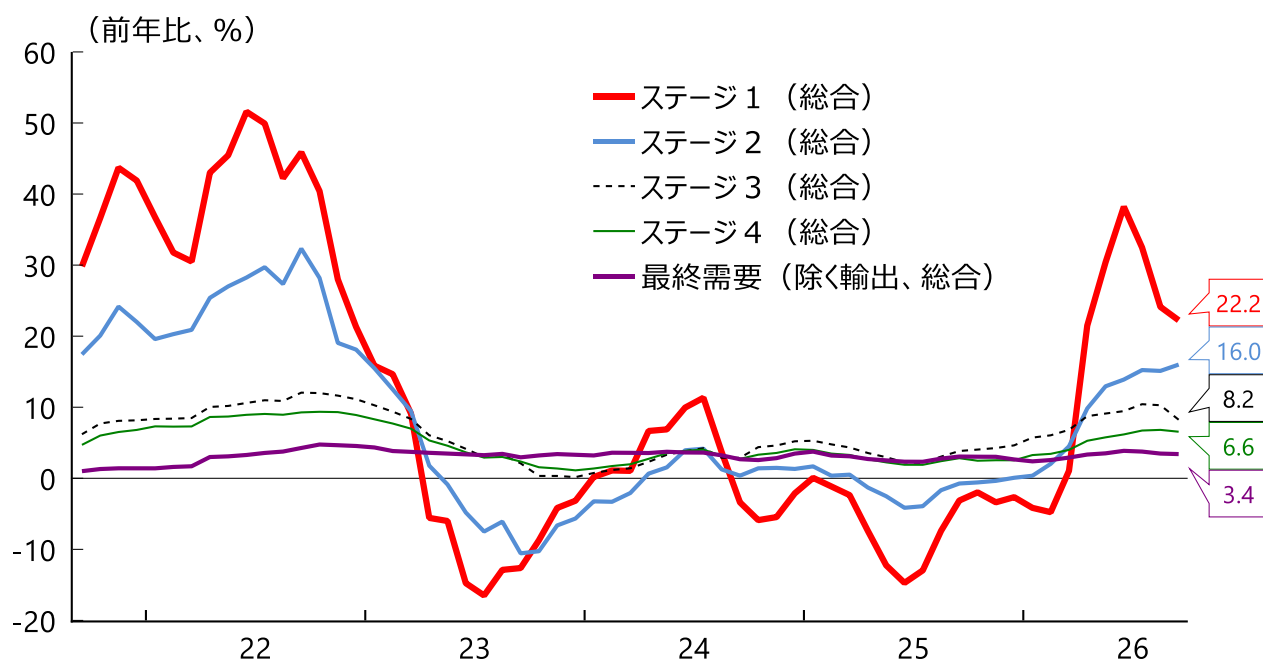
一方、より川下に近い「ステージ3」は同+8.2%（前月：同+10.3%）、「ステージ4」は同+6.6%（前月：同+6.8%）と、それぞれ伸びが鈍化した。特にステージ3については、9月の企業物価指数を下押しした玄米の価格動向が反映されたことが主な要因である。

また、対象品目のカバレッジに近いFD-ID指数の「最終財・消費財（国内品）」と消費者物価指数（CPI）の「財」を比較すると、足もとでは対照的な動きが見られた（図表2）。

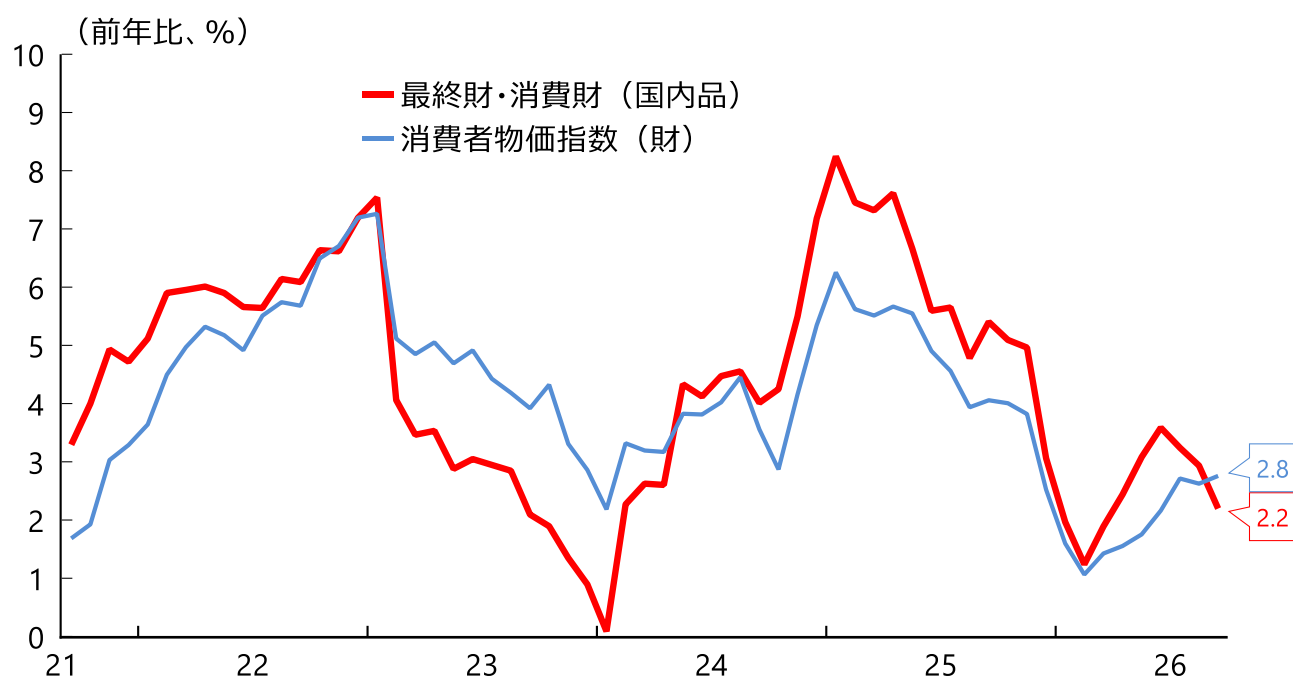
FD-ID指数は前年比+2.2%と、前月（同+2.9%）から伸びが鈍化した。精米や生鮮野菜の価格低下が主な下押し要因である。一方、CPIは同+2.8%と、前月（同+2.6%）から幾分加速した。CPIにおいても生鮮食品等による下押し圧力はあったものの、それを上回る規模で、その他の食料品や日用品、耐久財の値上げが広がった格好だ。指数に含まれる品目のカバレッジ等の違いがあるため、単純な比較には慎重を期す必要があるが、これまで企業部門に滞留していたコスト上昇圧力が、時間差を伴って消費者向けの小売価格へ転嫁され始めている可能性がある。

以 上

図表1 FD-ID指数の推移



図表2 FD-ID指数と消費者物価指数の推移



(注)直近は9月。消費者物価指数は消費税を含むベース、その他はFD-ID指数で消費税を含まないベースの指数。

下図のFD-ID指数と消費者物価指数では、輸入品(完成品)の有無や「流通・小売マージン」の有無、ウェイト算出基準の違い等があるため、厳密な比較には留意が必要である。

(出所)Macrobondより第一ライフ資産運用経済研究所作成